



一 うんこ大王登場

今日は日曜日。学校のある日は、朝六時半には起きるけれど、休みの日は九時過ぎまで寝ている。パパもママも眠っているのか、起こしに来ない。まだ、ふとんの中にいようとマンガの本を手にする。だけど、急にお腹が重くなってきた。だめだ。僕は飛び起き、トイレに駆け込んだ。

「ふう。すっきりした」レバーを回そうとすると、ジャジャジャーと音がした。たまり水から、何かが飛び出して来た。うんこ大王だ。

「こら。いつも言っているだろう。ちゃんと、自分が出したうんこを見ないといけないと。うんこを見れば、その日の体の調子がわかるんだから」大王は腕を組んだまま、眉をしかめている。

「はい」大王の強い口調に、僕は頷くしかなかった。でも、うんこ大王と会うのは久しぶりだ。なんだか懐かしい。日ごろは、僕のお腹の中で活躍してくれているのだ。

「それに、なんで、今まで我慢していたんだ。健康のためには、いつも同じ時間にトイレをするのがいいんだぞ。今は何時だ」

「ええと。九時半ぐらいかな」さっき見た時計の時間を思い起こそうとした。

「ほら、みろ。いつもよりも三時間以上も遅いじゃないか。わしが出でようにも、お前がトイレに行かないから出られなかったんだ。だから、お腹の中で暴れ回ったんだ」

「あっ、そうか。だから、急にお腹が痛くなったんだ」

「おかげですっきりしただろう」大王は満足そうな顔で頷いている。

僕は引っこんだお腹を触る。そうか。寝ることや起きることと一緒に、毎日、同じ時間にトイレにも行く方がいいんだ。

「わかったよ。休みの日でも、同じ時間に、トイレに行くようにするよ」僕はそう言うと、急いでトイレのレバーを回そうとした。大王には怒られるけれど、自分のうんこをまじまじと見たいとは思わない。

「待て、待て」大王が僕の手を止めようとする。

「どうしたの。まだ、話があるの？」早く何とかしないと。

「話と言うよりも、頼みじゃ」大王は先ほどと違って声の調子が柔らかくなった。

「頼み？」僕は首をひねった。これまで大王からは、なにになにしろ、とか、なにになにするなどが、命令ばかりだった。急に、頼みと言われて、とまどった。

「実は、わしを外の世界に連れて行って欲しいんじゃ」大王が慣れない手つきで手を合わせる。

「外の世界？」

「そうじゃ。以前、王子が小学校に行ったように、わしもどこかに連れて行って欲しいんじゃ」

「今日は、学校は休みだよ」この前、王子を学校に連れて行って、いろいろあったのに、大王を連れて行けば、もっと大変なことになると思い、僕はすぐさま断るための返事をした。

「学校は王子が行ったから、いい。今日は休みだから、家族でどこかに出掛けるんじゃないのか？」大王は僕の顔を見て、探りを入れてくる。

「どうかな？」パパやママはまだ寝室だ。休みの日は僕と同じように、パパやママも遅い。いや、僕以上に遅い。パパは普段の日は、朝早くから仕事に行って、帰ってくるのは晩遅くだ。だ

から、その反動なのか、休みの日は、起きるのがいつも遅い。今日、お出かけするかどうかはわからない。パパ次第だ。

「そんなに遠くまで出掛けなくてもいいんじゃない。家の周りでもいいぞ。久しぶりに外の世界に出たいんじゃない。じゃあ、話は決まった」と、会話を強引に中断すると、大王はたまり水から飛び上がり、僕のパジャマの胸ポケットに飛び込んだ。

「ひゃあ」濡れるじゃないか。それに、臭うんじゃないか。僕は慌てた。

「心配するな。表面張力で、濡れやしないし、臭いもしない。もちろん、ファブリーズもいらないぞ」大王は僕の心配を見透かしたかのように平然と答える。

くん、くん。確かに臭わないし、胸ポケットも濡れていない。取りあえずほっとするものの、これからが大変なことに気が付く。大王を外に連れて行かないといけなくなった。でも、今さら、大王をたまり水に戻すわけにもいかない。

「でも、これはパジャマだから、外出着に着替えないといけないんだ」何とか行かない口実を作ろうとする。

「じゃあ、早く着替えてくれ。折角、外の世界に来たんだから、一日を有効に使いたいんじゃない」仕方がない。ここは大王の言う通りにするか。僕はトイレのレバーを回し、パパやママに見つからないように急いで部屋に戻った。パジャマを脱ぎ、ポロシャツを被り、ジーンズを履いた。準備が整ったのを見ると、大王は、ベッドの上のパジャマの胸ポケットからポロシャツの胸ポケットに頭から飛び込んだ。すごいジャンプ力だ。これも何とか張力のおかげなのか。

「よいしょっと」大王は僕の狭い胸ポケットの中で頭と足を器用に入れ替え、顔を出して辺りを見回して叫んだ。

「出発、進行！」まるで、船長みたいだ。

「出発って、どこに行くの？」僕は胸ポケットを覗く。

「どこでもいい。まずは、近所を散歩してくれ」

「散歩？」

「そう、散歩だ。散歩をすれば近所のことがよくわかっていいんだ」

「散歩ねえ」僕が首をかしげ、あいまいに答えた。家の周りなんていつも歩いている。わざわざ散歩する必要はないんじゃないか。

「お腹の中で、わしの部下は、わしの命令に、アイアイサーとひとつ返事で動くぞ」大王が威張っている。確か、外の世界に連れて行ってくれと手を合わせて頼まれたはずなのに、いつの間にか、大王から命令されている。やれやれ。自分のうんこに逆らっても仕方がない。僕はポロシャツの胸ポケットに大王を入れたまま、家の外に出た。

「外はやっぱり気持ちがいいな。空気が新鮮だ。それに、いい匂いがする。これは、何の花だ」

大王はポケットから顔を出し、玄関先の寄せ植えの鉢を指差し、僕に尋ねる。でも、花の名前なんかあまり知らない。知っているのは、桜と朝顔、ひまわり、菊ぐらいだ。全部、学校で咲いている花だ。

「ママが植えた花だから、よく知らないんだ」少し恥ずかしそうに答える。

「ふーん、そうか。知らないのか。もちろん、名前を知ったからと言って、その花のことがわか

るわけじゃないけどな」大王がしたり顔でうそぶく。

「でも、名前を知ることから、その花のことを知りたくなるんだ。相手に関心を持つことは大切なことだぞ」

大王がにやっと笑った。僕は大王の言う意味がよくわからなかったけれど、花の名前を知らないことを指摘され、何だか悔しかった。よし。散歩から戻ったら、インターネットで花のことを調べよう。ついでに、大王たちのことも調べてみよう。僕みたいに、自分のうんこやおしっこ話をしている人はこの世にいるのだろうか？